

追　　補

廣井勇博士傳記の再刊に就て

昭和三年十月一日廣井博士の突如薨去せらるるや朋友門人敬慕措く所を知らず博士の人格功績を後世に傳へんと欲し直ちに相集まりて記念事業會を起し其事業の一として博士の傳記を編輯し之れを刊行して同事業を援助せられたる諸家に頒布せり今回圖らずも文部省編纂の師範學校教科書中師範修身書卷三第八課責任なる題目の下に其教材として博士の言行採擇せられ上海港改良國際技術會議の席上各國權威者の提案の缺陷を指摘し責任ある學者の爲すべき所にあらざるを論じたること及び小樽築港當時未曾有の大暴風雨に際會せる時の博士の責任ある言動とを掲載せられ以後世子弟の教訓の資料とせられしを以て茲に下記の者胥謀り博士の傳記を再刊し全國師範學校其他に寄贈し廣く博士の人と爲りを詳知せしむると共に尙ほ教習の供材たらしめんと欲せり然るに原版已に失はれ刊行費尙大し其實現に付て苦慮しつゝありし所幸ひに嘗て博士の高恩に浴し崇敬今に渝らざる利光鶴松淺野總一郎

兩氏は進んで其事を賛せられ刊行費を負担せんことを申出られ王子製紙社長高島菊次郎氏も費用の外種々便宜を與へられたるを以て直ちに此計畫を實行することなせり往年記念事業を援助せられたる諸家の御諒承を冀ふ、尙ほ曩に遺脱せる銅像除幕式の記事其他を追補せり。

昭和十五年五月

名	井	九	介
古	藤	猛	哉
吉	村	惠	吉
池	邊	稻	生
杉	本	好	太
山	崎	匡	輔

傳記再刊につき所感

世に學識高遠、功業群を抜くの人尠からず然れども之れに加ふるに至誠至公、弱きを扶くるの心強く些事に對しても責任ある言動を執らんとする廣井博士の如きは蓋し稀なり、余の鬼怒川水力工事を創むるや當時最も難工事と稱せられ容易に竣工せしむること能はざる可しとの世評あり然るに博士は此工事の帝都幾百萬市民に寄與する所大にして誠に國家的大事業なるを認められ殊に余の富豪ならざるの故を以て喜んで余の請を納れ親しく指導の任に當られ懇切周密運算なく温容の内勇剛の氣魄を以て遂に豫定の期日に先ちて之れを完成せられたり其偉大なる人格には唯々景仰措く能はざる所にして今に於ても其鴻恩を肝銘する所なり、君責任の念最も強く工事完成後も風雨ある毎に常に其狀況を尋ねらるゝこと渝らず、今回博士の言行の師範學校教材に選ばれたる誠に故ある所にして君の如き偉人は其功績言行永く後世不滅の教訓を遺すものと謂ふ可し、傳記の再刊に當り聊か之れに與かることを得感謝の萬分を果す機會を得たるは誠に榮譽の極みなり茲に所感の一端を書し謹みて在天の靈に捧ぐ。

昭和十五年五月

鬼怒川水力電気株式会社々長

利 光 鶴 松

信念と責任感に生きた廣井先生を偲ぶ

淺野 總一郎

廣井先生は自己の信念に生きる人であり同時にまた稀に見る責任感の強い人でもあつた。亡くなつた父は仕事の關係で先生には色々とお世話になつたものであるが、先生のことについて父は『廣井さんは自分でこれは國の爲めになると考へられた事業ならいつでも喜んで面倒を見て下さるが、然らざる場合は幾ら御願ひしても到底駄目だ、實に見上げた人である』と。

よくこんなことを聞かされたものである。信念に生きる先生の一面が偲ばれる。

先生の遺された代表的事業とも云ふべき北海道小樽の築港工事の際などは自ら人夫と共にバラックの小屋に起居して工事一切を監督されたものである。父もその工事にセメントを納めてゐた關係上時々工事現場を訪ねたことがある。早朝五時半頃現場に行くと既に先生は作業服に身を固めバラックのコンクリート研究室からニコ／＼笑ひながら出て來られるのが例であつた。これには流石早起自慢の父も宛を脱いださうである。或る日非常な大時化のあつた日に「今日こそはわしの方が早い」とばかりに父は早朝四時頃に現場へ行つた。ところが先生は既に全身濡鼠となつて焚火にあたりながら例によつてニコ／＼笑ひながら、「淺野さんあなたのところのセメントがよかつたので

御蔭でこの大時化に遭つても大したこともありませんでした』と云はれ、前夜から一睡もされずに工事を監督されたにも拘はらず少しの疲労も面に表はされず話をされたといふことである。

小樽の築港工事を監督されて居られた當時先生は常に父に向つて『自分は土木の技術については全責任を以つてこれを完成せしめる自信があるが、その爲めにはどうしてもセメントの品質がよくなければいけない。セメントの方はあなたの方で是非責任を以て製造して貰はねばならない』と、舶來品にも勝るセメントを製造し度いといふことは父の年來の希望でもあつたので、先生のこの言葉に一層勵まされ父もセメントの品質問題には特に力を注いだものである。

幸にしてその努力が報いられ現在どうかその目的を達し得たといふのも先生のこの強い責任感に負ふところが多かつたと今更ながら感謝せざるを得ない次第である。

自己の信念と責任とに強く生き得る人の極めて少ない今日、而も東亞の新秩序建設といふ曠古の大事業に猛進せねばならぬ現下の我が國に於いて私は今更ながら先生の偉大さを偲ぶにつけ再びかゝる大技術家の出現を特に待望して止まざる次第である。

廣井勇博士銅像の建設に就て

廣井工學博士記念事業會は、博士の偉業風格を追憶する記念として、傳記編纂の外其事業の一として、記念銅像を建設することありしを以て、豫め其製作を東京美術學校教授水谷鐵也氏に依嘱し、建設の場所を由緒最も深き北海道小樽公園に選び、昭和四年十月十二日博士夫人令嬢令孫等臨席の上、嚴肅に其除幕式を舉行せることは、傳記の卷頭、記念事業會願末に記載せる所なれども、原稿の都合上其詳細の記事を掲ぐるに能はざりしを以て、茲に之れを追補採録することとなせり。

銅像除幕式

廣井博士の北海道に深き緣故を有せらるることは傳記の諸所に記述せる所の如くにして、明治十年札幌農學校入學の爲め第一步を此地に印せられしより以來、全生涯を通じ、直接間接北海道と關聯せられざるなく、北海道の開拓各般の計畫たるや博士に負ふ所頗る多く、特に小樽港の施設に就ては一層の心血を注がれ、功績著大なる處なれば、博士の記念銅像を此地に建設せらるるは最も意義ある所

なるべし。

銅像は胸像とし、實體の一倍半大、花崗石臺石上に安置せられ、總高地上より約十二尺、昭和四年十月十二日盛大に其除幕式を舉行せられ、參列せるもの御遺族の外朝野の名士參百貳拾餘名なり。

此日、夜來の強風雨朝に至つて和らぎ、午前九時頃より霽れ渡る、胸像建設の地は、小樽港を展望し得る公園内の高地、東山にして、其四周には幔幕を回らし式場とす、胸像は紅白の幕に覆はれ、其上部並正面左右に天幕を張り、右側は御遺族席、左側は實行委員及係員の席に充つ、聽て定刻に至るや、古藤猛哉氏開會を宣し、先づ拾名の神官により莊嚴なる修祓の式行はれ、記念事業會委員長の玉串は伊藤長右衛門氏奉奠代行し、綱子未亡人、博士の長女久保田夫人、四女田中京子夫人、令孫田中吉子嬢、女婿久保田敬一氏、小樽市長木田川奎彦氏の順序にて玉串を奉奠し、續いて昇神撤饌し祭壇を撤去したる後、田中吉子嬢の手によつて紐條を引かれ幕は除かる、時に背景をなせる白樺の樹々には陽光照り添ひ、温容在ますが如き博士の胸像現はるるや、滿場拍子鳴りも止まず、同時に水天宮山上より發したる一發の號砲を合圖に、小樽港内碇泊の汽船數十隻は一齊汽笛を吹奏して祝意を表す、列席者は素より小樽全市は一時偉大なる博士の遺徳を現はすに相應はしき感激の都に化したるの觀を呈せり。然して伊藤長右衛門氏全部白色の生花より成る花輪を進御、之れに續いて古藤猛哉氏より左

故工學博士廣井勇先生記念像建設事業事務報告

廣井先生ノ胸像建設ノコトハ先生御在世ノ内カラ北海道ニ於ケル二三ノ門弟間ニ話ガアリマシタガ斯様ノコトハ先生ノ平素カラ考フルト豫メ御承諾ヲ得ルト云フコトハ殆ンド不可能ノコトト考ヘラレマシタノデ鬼ニ角計畫ヲ進メテ無理ニモ御承諾ヲ得ルコトニシヤウト云フノデ是ニ關スル第一回ノ會合ヲ開キマシタノハ昨年ノ七月二日デアリマス、此時北海道帝國大學工學部カラ四人道廳ノ門弟ガ五人相集リマシテ先以テ發起人ヲ選定シ第二回目ノ會合ヲ八月十四日ニ開キマシテ發起人タル承諾ヲ求ムルコトニシ又一方本道カラ上京スル者モアリマシタノデ在京ノ心當リヘ本道ノ計畫ヲ話シ寄リ々承諾ヲ求メタリナドシテ居タノデアリマス其ノ後北海道廳ノ伊藤技師ガ出張ノトキ親敷先生ニ御目ニカ、ラレル機會ガアツタノデ、ソレトナク同氏カラ御話申上ゲタ處ガ強テ御反對ナサルト云フ風ニモ見エマセンデシタノデ愈々力ヲ得テ計畫進行ノ積リデ居リマシタ、ソレカラ僅數日後タル十月一日ニ先生ハ幽明界ヲ異ニスルニ至リマシタノハ御同様残念至極ノコトデアリマス

十月十七日ニ東京デ先生ノ友人門弟ガ集リマシテ先生ノ記念事業トシテ三ツノ計畫ヲ進メルコトニナリマシタ即チ

一、記念像ヲ北海道ニ建設ノ事

- 一、記念出版(傳記及御臨終ノ日迄編纂ニカメラレタル工學辭典等)ヲ爲ス事
- 一、獎學研究等ノ資金ヲ寄附スル事

ト云フノデアリマス、ソレデ今マデ本道デ計畫シテ居タ胸像建設ノ件ハ舉ゲテ本事業ノ一ツトナツタノデアリマシテ其建設ノ事業ハ北海道ニ於ケル實行委員ガ引受ケル事トナリ爾來其實行委員ガ會合ヲ催シマスコト二十回意ラズ計畫ノ實行ヲ進メテ來タノデアリマス

各位ノ御盡力ニ依リ本胸像ガ斯様ニ立派ニ出來上リマシテ溫容在マスガ如キ先生ノ御姿ヲ仰ギ見テ先生ヲ敬慕スルノ情更ニ切ナルモノガアルノデアリマス、又考ヘルト此胸像ハ先生御在世中ニ臘ゲナガラモ先生ノ御承諾ヲ得タノデアルト思フト誠ニ悦ビニ耐ヘナイノデアリマス

胸像建設地ニ付テハイロノノ説モアリマシタガ北海道ハ先生ガ幼ニシテ笈ヲ負ハレタ處デ云ハバ發祥ノ地トモ云フベク先生ハ又深く北海道ヲ愛好セラレ且本道ノ開拓ハ先生ニ負フ處非常ニ多ク其内デモ諸港灣ノ修築計畫ニ對シテ殆ンド先生ノ關與セザルモノナク殊ニ小樽港ノ築設ニ付テハ一層心血ヲ注ガレマシタノデ小樽市ヲ選定シ港内ヲ一瞬ノ間ニ集メ得ベキ公園内東山ト決定シタノデアリマス

以上ハ今日迄ノ經過デアリマシテ進ンデ胸像ニ就テ少シク申上マス

胸像ハ東京美術學校教授水谷鐵也氏ノ作デアリマシテ大キサハ實體ノ一倍半大デアリマス
前面ノ文字ハ佐藤北海道帝國大學總長ノ揮毫デアリマス

建設ノ方法ハ極メテ入念ナ工法ニ依ツタモノデアリマス先ヅ地下ヲ深ク掘リマシテ割栗石ヲ敷キ固メ其ノ上ニ厚三尺一寸ノ「コンクリート」ヲ以テ基礎トシ地上ニ出テ居ル部分ハ三段トナツテ居リマス即チ

- 下ノ台石 六 尺 角 厚一尺二寸
- 上ノ台石 三 尺 角 厚 一 尺
- 胴 石 二尺七寸角 長 六 尺

何レモ一枚石デアリマシテ岡山縣御津郡大野村万成山産ノ花崗石ヲ用キ本磨キ仕上デアリマス周圍ノ圍イ石ハ岡山縣小田郡北木島産ノ花崗石ヲ用キマシテ現レテ居ル處ハコレマタ本磨キ仕上デアリマス

此台石ノ上ニ胸像ヲ安置シマシテ地上カラノ總高サハ約十二尺デアリマス
石ノ方ノ全部ハ京都市ノ石工倉橋元吉氏ノ手ニ成ツタモノデ其組立ニ際シテハ同氏ガ態々京都カラ出張シテ來テ入念ニ仕上ゲタモノデアリマス

工費ハ基礎共デ九千二百四拾圓デアリマス、一切ノ收支計算ハ精算ノ上ニテ御銘々ニ御報告申上マス

胸像ヲ當小樽公園ニ建設スルコトニツキマシテハ六月十四日小樽市參事會滿場一致ノ御贊成ヲ得マシテ而シテ北海道廳長官ノ許可ヲ受ケマシタノデアリマス

尙先生ト縁因淺カラザル御當地ニハ先生ト舊知ノ御方モ多ク胸像建設ニ就テ格別ノ御配慮ヲ受ケマシタノデアリマス殊ニ其基礎工事及現場ニ於ケル組立又ハ式場ノ事等専ラ其衝ニ當ラレタル當市技師三原久君ニハ特ニ御盡力

ニナツタノデアリマス又胸像臺石ノ選定竝其意匠方面ニ就テハ北海道廳技師福岡五一君ノ御盡力ヲ受ケマシタ併テ茲ニ御報告スルト共ニ小樽市ノ各位竝此兩君ニ對シテ深厚ナル謝意ヲ表シマス
以上ヲ以テ報告ト致シマス

昭和四年十月十二日

故廣井工學博士記念事業會
北海道實行委員代表

古 藤 猛 哉

次いで廣井博士記念事業會委員長代理として東京より參列せる池邊稻生氏左の式辭を朗讀し滿場肅として傾聽す。

式 辭

故東京帝國大學名譽教授正三位勳二等工學博士廣井勇君ノ胸像建設工事竣成シ本日茲ニ除幕式ヲ舉行スルニ當リ多數各位ノ御參列ヲ忝フシ余ノ欣幸ニ堪ヘザルトコロナリ

廣井勇君ハ明治十四年札幌農學校ヲ卒業シ越ヘテ十六年志ヲ立テ、米國ニ渡航シ在留六ケ年、二十二年九月ヲ以テ歸朝ス其間或ハ米國政府ノ技師トナリ河川、港灣、鐵道、橋梁等ノ實地ヲ研究シ或ハ獨逸ノ大學ニ入り深ク心ヲ學理ノ探究ニ潛メ傍ラ英佛ノ諸國ヲ巡歴シテ具ニ土木工事ノ觀察ヲ遂ゲ常ニ其勉學ニ得タル智見ヲ實際ニ照

考シテ專攻研究ニ日モ足ラザリキ歸朝ノ後直ニ札幌農學校教授ニ任セラレ三十二年東京帝國大學教授ニ轉ジ爾來子弟ヲ薰陶スルコト三十餘年ニ及ブ其間君ノ該博ナル學識ト經驗トハ絶エズ實地ニ應用サレ函館築港ニ小樽築港ニ君自ラ之ガ主任トナリ身命ヲ賭シテ完成シタル外北海道内ヲ始メ本州、朝鮮、臺灣、樺太ニ至ル迄築港ニ橋梁ニ河川ニ水力電氣ニ君ガ高邁ナル識見ト豊富ナル獨創トニ依リ其成功ヲ見タルモノ頗ル多ク永遠ニ記念スベキ君ノ大ナル功績ハ到底短時間ニ之レヲ列擧スル能ハズ博士傳記ニ之レヲ收録セリ君ハ學生ノ薰育ト實地ノ指導トニ寸暇ナキ間ニ於テモ常時學理ノ研究發表ヲ怠ラズ波浪、波力、橋梁、力學、セメント等ニ關スル著書論文ニシテ内外ニ發表セラレタルモノ實ニ四十有餘種ニ及ビ誠ニ斯界稀ニ見ル偉人ニシテ我國土木工學界ニ廣井博士ノ存在セシコトハ全世界ニ對スル大ナル誇ト云フベシ昨年十月一日博士逝去セラル、ヤ君ガ生前ノ人格識見、學殖ヲ敬慕シ又多年薰育ノ恩義ヲ感謝スル知人、門人等相謀リ故博士記念事業會ヲ組織シ胸像建設、工學辭典編纂、獎學資金設定等ノ計畫ヲ定メ夫々進行中ニシテ其第一著手トシテ此地ニ胸像ヲ建設セリ

胸像建設地ニ選定シタル當小樽港ハ往年君ガ我國北門ノ鎖鑰ニシテ將來國家的重要ナル地點ナルベシトノ卓見ニヨリ自ラ築港事務所長トシテ萬難ト戰ヒ心血ヲ注ギテ完成シ以テ今日ノ隆盛ヲ見ルニ至リタル我國有數ノ良港ナリ今ヤ此大事業ノ跡ヲ偲ブ地點ニ君ノ胸像ヲ建立シ本日其除幕式ヲ行フ以テ故博士ノ靈ヲ慰ムルモノ多大ナル可キヲ信ズ

本胸像建設ノ計畫ヨリ本日茲ニ落成ヲ見ルニ至ル迄本道官民諸君ノ一方ナラザル御盡力ニ對シテハ感謝ノ至リ

ニ堪ヘズ特ニ本日ノ除幕式ニ際シ小樽市當局並市民諸君ノ熱誠ナル御援助ト御幹旋ニ對シ衷心ヨリ感謝スル次第ナリ

尙又本日ノ式典ニ當リ廣井家御遺族始メ御近親ノ方々遠路態々御列席ヲ忝フシ吾々一同ノ光榮ニシテ感謝措ク能ハザルトコロナリ、茲ニ博士ノ偉業ヲ追懷シ其概要ヲ述ベテ式辭ニ代フ

昭和四年十月十二日

故廣井工學博士記念事業會實行委員長

東京帝國大學名譽教授 工學博士 中山秀三 郎

次いで御遺族御近親を代表し、頗る感激に滿ちたる面持を以て、久保田敬一氏鄭重に謝辭を述べられ。其れに續きて北海道廳長官池田秀雄氏 北海道帝國大學總長男爵佐藤昌介氏及小樽市長木田川奎彦氏其他各方面よりの祝辭朗讀あり、東京より八十二歳の高齡を以て親しく來道せる淺野總一郎翁の祝詞には一同謹聽せり、終りに博士の同窓の親友宮部金吾氏感慨深き所懐を述べらる。其等祝辭を左に掲ぐ。

祝 辭

工學博士廣井勇君ハ學識人格一世ニ卓越シ其學界ニ貢獻シタル功勞ト本道港灣ノ修築ニ寄與シタル業績ハ萬人ノ

齊シク景仰スル所ナリ

今次博士ノ歿後一周年ニ當リ同志ノ士相謀リ其功績ヲ不朽ニ傳ヘンガ爲博士ガ生前渾身ノ精力ヲ傾注セル小樽港ヲ一眸ノ中ニ收ムベキ小樽公園東山ノ地點ヲ選定シ記念ノ胸像ヲ建設セラル今其除幕ノ式ニ參列シ鬚髯ノ間ニ博士ノ風格ヲ偲ビ願ミテ本道開拓事業ノ博士ニ負フ所大ナルモノアルヲ追想シ欽慕ノ念轉切ナルヲ覺ユ抑人壽ハ限リアルモ功業ハ滅スルコトナク肉體ハ亡ブルモ精靈ハ永ニ生ク博士ノ精神ト業績トハ永遠ニ光明ヲ放チ後人ヲ感發シテ矜式スル所アラシムルヲ信ズ

茲ニ博士ノ崇高ナル人格ト偉大ナル功績ニ對シ深甚ノ敬意ヲ表シテ祝辭ト爲ス

昭和四年十月十二日

北海道廳長官從四位勳三等 池 田 秀 雄

祝 辭

築港學ノ泰斗ニシテ橋梁力學ノ世界的權威故東京帝國大學名譽教授正三位勳二等工學博士廣井勇君ノ胸像漸ク其工ヲ竣ヘ本日ヲ以テ除幕ノ式典ヲ舉行セラル寔ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ君ハ高知縣ノ出身ニシテ資性剛毅高潔明治十年本道開拓ノ鴻志ヲ抱キ北海道帝國大學ノ前身札幌農學校ニ入學シ同十四年業ヲ卒ヘテ農學士トナリ開拓使御用掛トシテ幌內鐵道ノ建設ニ從事スルヤ其技倆人格ハ先輩松本莊一郎氏ノ認ムル所トナリ同十六年氏ノ推薦ニ依

リ渡米シテ留マルコト四歲或ハ治水工事ニ或ハ橋梁ノ設計ニ或ハ鐵橋ノ架設ニ幾多ノ貴重ナル經驗ト研究トヲ重ネラレシガ同二十年札幌農學校ニ工學科ヲ新設セラルルヤ助教ニ任ゼラレ獨逸留學生トシテ滯獨ニ歲土木工學建築學水利工學等ノ諸科ヲ研究シテ歸朝シ同二十二年教授ニ任ゼラレ專ラ英才ノ育成ニ盡瘁セラル翌廿三年北海道廳技師ヲ兼任シ深遠ナル學理ト洗練セル技術トヲ以テ本道港灣ノ修築事業ニ其巨腕ヲ振ヒ謀圖籌畫能ク機宜ニ適シテ大任ヲ完ウセリ就中函館築港工事ニ亞イデ學生ノ努力ヲ拂ヒタルハ小樽築港工事ニシテ起工ヨリ竣工マデ前後十一年辛苦艱難寢食ヲ忘レテ心力ヲ傾倒シ竟ニ能ク素志ヲ貫徹シ世界的工事トシテ中外ニ聲譽ヲ博シタル防波堤延長四千二百五十尺ヲ完成シテ小樽港今日ノ殷賑ヲ現出セリ

惟フニ本道ノ沿海船楫ノ便大ナルニ拘ラズ其發達ノ遲々タリシ所以ノモノ主トシテ築港事業ノ全カラザリシニアルハ言ヲ俟タズ君ハ少壯本道ニ渡來シ前半生ヲ育英ト開拓トニ捧ゲ獻身的ニ特ニ港灣修築ノ爲盡サレタル功績ハ寔ニ偉大ニシテ君ノ苦心經營ノ迹ヲ追想スル毎ニ感激轉々切ナルモノアルヲ覺ユ而シテ君ハ明治三十二年ヨリ大正八年マデ約二十年間東京帝國大學教授トシテ教鞭ヲ取ラレ育英ノ傍ラ幾多有益ナル工學ニ關スル報告論說著書ヲ中外ニ發表シ又屢々重要ノ職ニ擧ゲラレテ獻身スル所少カラザリシハ皆人ノ知ル所ナリ今ヤ君逝イテ一歲朝野ノ同志相謀リ茲ニ胸像ヲ建設シ以テ君ノ偉業ヲ景慕シ不朽ノ功勳ヲ萬世ニ傳ヘントス余明治十年以來或ハ學友トシテ或ハ同僚トシテ親交ヲ辱ウスルコト五十餘年君ノ崇高ナル人格ニ接シ談笑ノ間ニ自ラ啓發ヲ受クルコト多大ナリキ今除幕ノ式典ニ列シ生彩奕々タル其雄姿ヲ瞻望シテ誠ニ今昔ノ感ニ堪ヘズ茲ニ聊其功績ノ一端ヲ叙シテ祝

昭和四年十月十二日

北海道帝國大學總長男爵

佐

藤

昌

介

祝 詞

故工學博士廣井勇君ハ本邦工學界ノ泰斗ニシテ學德並高ク譽譽中外ニ洽シ殊ニ君ガ築港技術家トシテ世界的ニ其ノ手腕ヲ發揚セラレタルハ蓋シ我小樽市港灣修築事業ヲ完成シ以テ範ヲ斯界ニ寄與セラレタルニ在リ
願レバ明治二十五年北海道廳長官北垣國道氏本港修築ノ急務ヲ唱ヘ其ノ建議廟議ノ採擇スル所トナルヤ之ガ施工ノ大任ヲ君ニ託セラレタリ當時我國港灣修築ノ技術未ダ幼稚ノ域ヲ脱セズ採リテ以テ範トナスニ足ルベキモノナク爾來蘊蓄ヲ傾注シ幾多ノ研鑽ニ努メラレ明治三十年工ヲ起シ歲ヲ閱スルコト實ニ十一星霜終ニ此ノ大業ヲ完成シ本港灣ノ大策ヲ確立セラレタルハ唯ニ我小樽市ノ幸福タルニ止マラズ寔ニ邦家ノ進運ニ貢獻セラレタル偉績ニシテ永ク史乘ニ殘リ以テ不朽ノ好鑑ト爲スベキナリ

茲ニ君ガ知友並黨陶ノ下ニ在リシ諸氏相謀リ記念ノ像ヲ建設セラル、ヤ君ガ心血ヲ濺ギタル港灣ヲ俯瞰スベキ清淨明媚ノ地點ヲトセラレ本日之ガ除幕ノ式ヲ行フ亦以テ君ガ英靈ヲ慰ムルニ足ルベシ
本職乏シキヲ本市長ニ承ケ港灣施設ニ腐心シツ、アルノ時此ノ盛儀ニ列ス欣快之ニ過グルモノナシ

庶幾ハ一層本港ノ發展ヲ圖リ以テ君ガ不滅ノ功績ヲ顯彰センコトヲ聊所懷ヲ陳ベテ祝詞トナス

昭和四年十月十二日

小樽市長 木 田 川 垂 彦

祝 辭 (口述)

〔要領筆記〕

故廣井工學博士ノ胸像除幕式ヲ舉ゲラル、ニ當リ私モ亦此盛典ニ參列スルコトヲ得マシタノハ誠ニ欣ビニ堪ヘヌ次第デアリマス

私ガ博士ニ初メテオ目ニカ、リマシタノハ今カラ約三十年バカリ以前デ丁度御當地ノ防波堤施工ノトキ當時ノ築港事務所ニ所長ヲ勤メテ居ラレタ博士ヲ訪問致シマシタ其時博士ハ自ラ「スコップ」ヲ取ツテ施工ノ方法ヲ實地ニ御指導ニナツテ居ラレマシタノデ是ハ實ニ容易ナラヌ御方ト私ハ大ニ感激致シタノデアリマス

博士ハ寔ニ責任觀念ノ強イ御方デアリマシタカラ小樽港ノ築設ガ世界的工事トシテ中外ニ聲譽ヲ博シタルモ故ナキニアラズト思ヒマス

其後博士ハ東京帝國大學ニ御轉任ニナリマシタノデ私ハ時ニオ目ニ懸ル機會ヲ得マシテ私ノ各地ニ經營シテ居ル施設ニ付テハ多大ノ御指示ヲ仰グコトガ出來マシタ尙大キナ仕事ガ五六ヶ所殘ツテ居ルノデアリマス博士ハ昨年十月突如トシテ御病逝ニナリマシタノハ國家ノ爲寔ニ大ナル損失ト言ハネバナリマセン

博士ノ門下ニハ幾多ノ俊才ガ居ラル、コトデアルカラドウカ博士ノ偉業ヲ繼グ様ナ立派ナ御方ガ澤山出ラレンコトヲ希望致シマス是ガ博士ノ靈ヲ慰ムル所以ノ途カト考ヘマス私モ本年漸ク八十二歳ニナツタバカリデコレカラ大ニ仕事ヲナサウト考ヘテ居マスカラ博士ニ代ツテ御相談申上グル故博士ノ様ナ御方ガ御出ニナルナラバ博士ニ永別シテ途方ニ暮レテ居ル私モ勝手ナガラ非常ニ都合ガヨイト考ヘテ居リマス
今ヤ博士ノ胸像工成リ其面影ヲ偲ビ茲ニ所感ヲ述ベテ祝辭ト致シマス

昭和四年十月十二日

淺野 總一郎

祝 辭

本日茲ニ

工學博士故廣井勇君ノ胸像除幕式ノ盛典ニ列シ同窓同級ノ友ノ一人トシテ所懷ヲ述ベ得ルコトハ私ノ光榮且ツ欣幸トスル所デアリマス

君ハ土佐舊佐川藩ノ名家ニ産レ幼ニシテ父君ヲ喪ハレマシタガ十一歳ノ時笈ヲ負ヒテ上京シ東京外國語學校ニ入學セラレ其際初メテ我輩ト相識ル機會ヲ得タノデアリマス其後ニ札幌農學校ニ學ビ岩崎行親、南鷹次郎、新渡戸稻造、内村鑑三ノ諸君ト共ニ第二期生トシテ明治十四年學業ヲ畢リマシタ君ハ在學中ヨリ土木工學ニ志シ卒業後

開拓使鐵路科ニ於テ幌内鐵道工事ノ橋梁建設ノ擔任ヲ命ゼラレ後日橋梁力學ノ權威トシテ光輝アル初陣ニ功ヲ樹テマシタガ海外留學ノ志熾ニシテ遂ニ米國ニ渡リ鐵道橋梁ニ關スル實際事業ニ從ヒナガラ勉學サレマシタ然ルニ明治二十年官命ニ依リ獨逸ニ留學シ二ケ年ノ研鑽ヲ積ミテ歸朝スルヤ札幌農學校教授ニ任ゼラレ工學科新設ニ盡瘁セラレ爾來八年間英才教育ニ當ツタノデアリマス而テ此間他方ニ於テ北海道應技師トシテ道内港灣事業ノ調査設計ニ關與シテ貢獻スル所多大デアリマシタ就中小樽築港ハ十有一年ノ長キニ亘リ實ニ君ガ心血ヲ澆ゲル苦心經營ノ結晶ト稱スベキデアリマス此工事ニ於テ君ハ火山灰ニ「せめん」とテ混ジテ「こんくりー」とぶろつく」ヲ作リ大規模ノ防波堤構築ヲ試ミ偉大ナル功績ヲ擧ゲタコトハ素ヨリ君ガ科學的實驗ニ對スル確信ニ依ルト雖モ亦君ノ驚嘆スベキ英斷ニ歸スルヲ憚ラナイノデアリマス

君ハ其後約二十年ニ亘リ東京帝國大學工科大學教授トナリ専ラ橋梁學ヲ講ゼラレ其ノ門下カラ幾多優秀ナル人物ヲ出シタルハ勿論デアリマスガ又君ノ研究ニ對スル獨創力ト學殖トハ斯學ノ進歩ニ寄與スル所頗ル大デアツタコトハ數十篇ニ依ル論文著書ニ據ツテモ是ヲ窺フコトガ出來ルト信ズルノデアリマス
然ルニ大正八年帝國大學教授ノ職ヲ辭スルヤ君ノ名譽ハ頓ニ高マリ學術研究會議員、港灣調查會議員、震災豫防調査會委員、上海港改良技術會議日本代表、帝國經濟會議々員等ニ擧ゲラレ我國斯界ハ君ノ人格卓見ニ待ツ所益々多キ觀ガアリマシタ

廣井君ノ性質ニハ聊モ飾リ氣無ク眞摯デアリマシテ實名ヤ偽善ノ行爲ヲ痛ク嫌ハレマシタ而シテ責任觀念強ク且

ツ果斷豪毅ノ性格ヲ有シ正義ト眞理ノ前ニハ人ヲ怖レズ成敗ヲ顧慮セズ勇往邁進スル氣魄ノ持主デアリマシタ乍
然他ノ半面ニ於テ實ニ心ノ奥底ニ溢ル、バカリノ人間的ナ温情ヲ抱イテ居ツタノデアリマス最後ニ我輩ガ言ヒ殘
シ難イ大切ナル事ハ君ガ實ニ敬虔ナル基督信者デアツタ事デアリマス乍然君ハ信仰ニ就テハ完ク沈黙實踐ノ立場
ヲ終リマデ守ラレマシタ惟フニ廣井君ノ生涯ハ天稟ノ英資ニ加フルニ修養練磨ノ功ト相俟ツテ其ノ根柢ヲ宗教的
信仰ノ聖火ニ淨ノラレ國家社會ニ對シ偉大ナル功績ヲ遺シタ者トシテ蓋シ過言デ無カラウト存ジマス
君ガ若キ日ニ於テ全人格的ノ基礎ヲ培ヒタル北海道ノ地ニ殊ニ君ガ激烈タル英氣ヲ傾倒シテ經營セシ小樽港ニ由
緒深クモ今回美事ナル胸像建設セラレ永ク其ノ盛德ヲ記念セラル、ニ當リ五十餘年ノ友情ヲ回想シ其ノ面影ヲ偲
ビテ轉々感慨新ニ迫ルモノガアリマス

茲ニ燕辭ヲ重ネテ謹ミテ祝意ヲ表スル次第デアリマス

昭和四年十月十二日

宮 部 金 吾

次いで祝電の披露あり、斯くして除幕式は莊嚴且つ雄大に終了、古藤猛哉氏閉會を宣す、後ち胸像
前に御遺族一同列立の寫眞を撮影し、右終つて公會堂に於て開宴、伊藤長右衛門氏開宴に當り博士の
平素の御教訓に基き簡素なる祝宴を設けたる旨の挨拶を述べ、木田川小樽市長來賓を代表し、又久保
田敬一氏は御遺族を代表し、各謝辭を述べられ、午後二時井出度散會す、出席者二百七十五名なりき。

附 録

參 考 資 料 目 録

一、編輯委員及帝大土木教室にて蒐集せる資料及提供者

一、廣井勇君小傳 一

宮 部 金 吾氏

札幌同窓會第五十回報告別刷

一、廣井博士書翰目錄 一

伊 藤 長 右 衛 門 氏

半紙四枚

一、遊冥廣井先生行狀 一

岡 田 虎 輔 氏

石版刷一枚

一、博士出生邸宅に關する書狀

山 崎 正 董 氏

岡田虎輔氏宛書翰

一、青年時代の廣井勇君

大 島 正 健 氏

原稿紙三枚

一、故廣井博士を悼みて

「港灣」昭和三年十一月號所載

一、故廣井博士の履歷

「港灣」昭和三年十一月號所載

一、舊友廣井勇君を葬るの辭

「聖書の研究」昭和三年十一月號所載

一、故廣井先生の追憶

半紙二十二頁

一、扇子 一本（廣井博士の書）

一、廣井先生の面目

山崎匡輔氏宛書翰

一、行燈の繪ハガキ一枚

井上 範氏宛

一、廣井屋敷と墓地の寫眞二枚

一、廣井遊冥（土佐偉人傳の寫）

井上 二 範氏

關田 駒吉氏

内村 鑑三氏

岡田 虎輔氏

岡田 虎輔氏

吉村 惠吉氏

十川 嘉太郎氏

半紙一枚

一、經歷書（廣井博士自筆）

郵紙三枚

一、廣井先生を偲ぶ

半紙二枚

一、功績上申書 一通

一、經歷書 一通

一、廣井先生に就て

岡田虎輔氏宛郵紙三枚

一、追慕

記念事業會宛郵紙十三枚

一、故廣井勇博士を偲びて

岡田虎輔氏宛原稿紙六枚

一、學海の巨人廣井勇先生

土木建築工事畫報昭和三年十一月號所載

大村 卓一氏稿

東京帝國大學

東京帝國大學

杉野 敬次郎氏

奈良井 多一郎氏

外村 義郎氏

岡崎 保吉氏稿

一、噫廣井勇博士

土木建築雜誌シビル昭和三年十一月號所載

一、故前會長工學博士廣井勇君略歴

土木學會誌 昭和三年十二月號所載

一、小樽築港に關する廣井博士の功勞

半紙六枚

石橋 絢二彦氏

外十氏稿

山崎 匡輔氏稿

西村 保吉氏稿

二、直接編輯者に談話或は書面にて寄せられたる資料及氏名

一、博士の信仰に關し (談)

大島 正健氏

一、博士の製圖に關し (書面)

遠武 勇熊氏

一、博士在米中の小話 (談)

樺島 正義氏

一、博士の乘馬に關し (書面)

岡崎 文吉氏

一、博士と木管に關し (書面)

岡崎 文吉氏

一、博士の博愛に關し (談)

外村 義郎氏

一、博士と北海道長官に關し (談)

小野 常治氏

一、博士渡米の保證人に關し (談)

小川 敬次郎氏

一、北海道炭礦鐵道時代 (書面)

植村 澄三郎氏

一、北海道炭礦鐵道時代 (談)

友成 仲氏

一、室蘭築港其他に關し (書面)

井上角五郎氏

一、工事費の節約に關し (談)

西村 保吉氏

一、小樽築港第一期工事竣工式の件 (書面)

内田 富吉氏

一、六郷橋設計に關し (書面)

伴 宣氏

一、博士の橋梁工學に關し (談)

田中 豐氏

一、港灣の設計に關し (談)

鈴木 雅次氏

一、博士の教授法に就て (談)

眞島 健三郎氏

一、在米中の博士 (談)

古藤 猛哉氏

一、博士と私の亡父に就て (談)

安藤 左代氏

一、博士の逸話 (談)

中村 廉次氏

一、博士と橋梁に就て (談)

杉森 文彦氏

一、博士と北海道の事業に就て (談)

渡邊 兵四郎氏

- 一、後進の世話 (談)
- 一、博士の宴會嫌に就て (談)
- 一、博士と土木學會の創立 (談)
- 一、博士の逸話 (談)
- 一、博士と鶴に關し (談)
- 一、博士の日常に關し (談)
- 一、博士の後進指導に關し (談)
- 一、工學上の貢獻に關し (談)
- 一、博士の指導に關し (談)
- 一、米國土木學會と博士 (談)
- 一、廣井博士を思ふ (書面)
- 一、博士の後進指導に關し (談)
- 一、博士の恩顧に關し (談)
- 一、博士の教授振りに關し (原稿)
- 一、廣井博士逸話錄 一冊

- 河野 富重氏
- 三浦 宇三郎氏
- 中山 秀三郎氏
- 名井 九介氏
- 倉塚 良夫氏
- 廣井 綱子氏
- 阿部 美樹志氏
- 物部 長穂氏
- 八田 嘉明氏
- 平井 喜久松氏
- 淺野 總一郎氏
- 杉本 好太郎氏
- 關 毅氏
- 山崎 匡輔氏
- 伊藤 長右衛門氏

右内容 談話者

- 同
- 同
- 同
- 同
- 同
- 同
- 廣井博士の書翰 七十通
- 廣井博士青年時代の製圖寫眞 二枚
- 故廣井先生小傳 一冊
- 寫眞及圖面
- 廣井家系譜
- 寫眞 版 二ヶ
- 廣井博士書翰 十四通
- クラーク先生傳 一冊
- クラーク記念堂記念誌 一冊

- 佐藤 昌介氏
- 伊藤 長右衛門氏
- 古藤 猛哉氏
- 土井 良太郎氏
- 保原 元二氏
- 中村 廉次氏
- 伊藤 長右衛門氏
- 同
- 同
- 廣井 綱子氏
- 廣井 綱子氏
- 十川 嘉太郎氏
- 宮部 金吾氏
- 同
- 同

同記念繪葉書 三枚
 鬼怒川水電に關する廣井博士の意見書 一冊
 書翰 一通
 博士青年時代寫眞 一枚
 上海港改良會議報文(英文) 一冊
 廣井博士橋梁學講義草稿(英文) 一冊
 葉書 一枚
 葉書及書翰各一通
 名刺貼付帳 一冊
 懷舊談(博士自筆の原稿)
 書翰 六通

同 入
 池邊 稻生氏
 同 氏
 宮部 金吾氏
 池邊 稻生氏
 中山 秀三郎氏
 山崎 匡輔氏
 井上 範氏
 山崎 匡輔氏
 岡崎 保吉氏
 中村 廉次氏

三、參考書目

故工學博士廣井勇先生記念像建設事務並會計報告 一冊
 故廣井勇博士略傳(胸像除幕式に際し岡崎保吉氏稿) 一冊

胸像除幕式の式辭(委員長中山秀三郎)
 入校證書(廣井博士自筆)
 札幌農學校一覽 一冊
 小樽市都市計劃報告書 一冊
 小樽市地圖 一枚
 函館築港工事報文 一冊
 小樽築港工事報文前編 一冊
 同 後編 一冊
 明治八年官員錄 一冊
 東京帝國大學工學部紀要
 築港 二冊
 日本築港史 一冊
 港灣
 港灣調査會委員會速記錄
 工學會誌

北海道帝國大學

土木學會誌

土佐偉人傳 (寺石正路著)

偉人野中兼山 (西内青藍著)

維新土佐勤王史 (瑞山會編)

維新風雲回顧錄 (田中光顯著)

土佐の勤王 (徳富猪一郎著)

(以上)

昭和五年十月一日初版發行
昭和十五年七月七日改版印刷
昭和十五年七月十日改版發行

【非賣品】

編輯者兼
發行者

故廣井工學博士記念事業會

右代表者

東京市麻布區本村町百十六番地
吉村惠吉

印刷所

東京市本郷區湯島四丁目廿二番地
精文堂印刷所

東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地

發行所 工專畫報社

電話丸之内二六三三番
換替東京七〇二六五番

工學博士
廣井勇傳